渋沢栄一と神社

明治神宮

明治 45 年（1912）7 月 30 日、明治天皇が亡くなると、栄一は東京市長（栄一翁の娘婿）ら民間有志たちと協議して、明治天皇の陵墓を造ろうと運動を起しましたが、陵墓は京都伏見（桃山）に内定していることが宮内省から公表されたため、有志の運動は、明治天皇を祭神とする神社建設にむけて舵をきることになりました。栄一は、明治神宮奉賛会の副会長として寄付金集めに奔走しました。明　治神宮は内苑と外苑から成り、内苑は国費で造られ、外苑は栄一たちが中心になって寄付金を集めて造りました。現在も、神宮外苑の銀杏並木をくぐりぬけると、外苑の中心的な建物で、明治天皇と昭憲皇太后の事績を描いた歴史的・文化的にも貴重な絵画を展示している聖徳記念絵画館があります。付近には、神宮球場、東京オリンピック・パラリンピックが開催される新国立競技場などもあります。

上空から見た明治神宮　提供明治神宮

明治神宮内苑は、都会の喧騒を忘れさせてくれる、うっそうとした森に覆われています。これは栄一ら明治神宮造営局の呼びかけに応じて全国から集まった約 10 万本の献木、そして 11 万人におよぶ全国からの青年団による勤労奉仕によってつくられた人工の森なのです。当時首相だった大隈重信は、伊勢神宮のような針葉樹林中心の荘厳な森にする構想をしていました。しかし栄一や専門の学者たちが、代々木の土地に最適な樹種を熟考の末、カシやシイといった常緑広葉樹を中心とした森が作られました。第二次世界大戦では、空襲に見舞われ、明治神宮の社殿も焼け落ちました。しかし、常緑広葉樹は火に強かったので、明治神宮の森は焼失を免れました。本年、百年を迎えた明治神宮。歴史を学び先人たちの「思い」を知ってお参りに行くと、大切な様々な気づきを得ることができるかもしれません。

神宮外苑　　提供　明治神宮

七社神社

北区西ヶ原にある七社神社は、江戸時代から旧西ヶ原村の鎮守で、栄一も同村内に飛鳥山邸を構えたことがきっかけに氏子になりました。大正 9 年には、栄一を中心に、寄付により社務所が作られました。この社務所は、栄一が支援した西ヶ原青年会の活動拠点となる「会堂」も兼ねて作られました。現在の社務所は、昭和 42 年に建て替えられたものです。栄一は、さらに本殿・拝殿の建築にも貢献しました。現在も七社神社の拝殿を見あげると、社名額の七社神社の文字は、栄一が毛筆で書いた文字（揮毫）なのです。他にも栄一の書いた掛け軸も社内に納められています。

毎年 9 月秋分の日とその前日に行われる七社神社の例大祭で、そのもととなったと思われる栄一書「七社神社」掛軸が、西ヶ原の町中に設けられる御神酒所に掛けられます。このことからも、七社神社を中心に、栄一は西ヶ原の人々との交流を深め、町の事業にも協力したことが窺えます。
私たちが行く七社神社の祭礼や初詣、美しく紅葉した神宮外苑の銀杏並木や、新年の幸福を願う明治神宮も、栄一の想いが息づいているのです。

栄一揮毫社名額　　提供　七社神社